

*）雑誌「大阪人」1994年所載（と記載されているが、詳細不明）

文楽を愛した天文学者－石田五郎

加藤 賢一（大阪市立科学館）

昨年、文楽界では新たに吉田文雀と吉田簗助のお二人が人間国宝と認定され、めでたいことであった。人間国宝では先輩の吉田玉男師匠を文楽劇場にお尋ねした折のことである。「いや、天文の先生でね、いろいろ面白いものを見せてくれる人がいる。この前もアフリカの・・・」という話をされた。二年半ほど前、プラネタリウムで曾根崎心中のさわりを紹介したいと思ってお邪魔した時のことで、「それは石田先生ですか？」と尋ねると案の定そうだった。それにしても玉男師匠らと親しくお話をされているとは、驚きであった。それから三ヶ月後、石田先生は病没された。まだ七〇前であった。

故石田五郎氏は一九二四年東京に生れ、東京帝国大学天文学科を卒業後、東京天文台に入って岡山天体物理観測所の所長として活躍された。岡山観測所は一九六〇年、日本最大の望遠鏡を有する観測所として開設され（そして今でも日本最大）、石田先生は三〇代なかばにしてその現地責任者となった。岡山では言いたくないとも言わなければならない立場で、いきおい顔つきも厳しくなったのだろうと思う。東大退官後は東洋大学の教壇にも立たれ、「私の講義はなかなか人気があるんだよ」と所長時代とはうってかわってにこやかに話していた。

そんな激職の合間をぬって文楽がかかるたびに岡山から大阪まで足を運んでいたようで、そんなこととは知らずに先生が大阪の地理に明るいのを奇妙に感じたことがあった。講演会をお願いしたら場所の説明は不要だとおっしゃる。後で聞いたら、朝日座にせっせと通っておられて知悉されていたのだ。二〇年も前のことで、私などは文楽にはまったく縁がなく、失礼なことに大の大人が（先生は本当に大柄だった）似合わぬことを、マア好きだなア、という程度の認識しかなかったのだが、先生は本当に熱烈な文楽ファンだったし、それがストレス解消剤だったのだろうと思う。

三年ほど前、先生がふらりと科学館にお出でになった時、私は星が登場する近松の曾根崎心中の一場面をプラネタリウムでとりあげようと決めた。そして、その公開直後、星の文楽を作るんだと楽しそうに語っていた自称二世天文屋は天界に旅立って行った。